＜論文＞

現代四国の〈歩き遍路〉に見る「癒し」の一様相

帆 苅　猛*1

One Aspect of Healing in the Modern Shikoku Pilgrimage

Takeshi Hogari*1

One characteristic of the Shikoku pilgrimage is the wide variety of people who are able to set out upon it. This sense of welcome finds its roots in the Daishi belief. This stands in antithesis to the modern Japanese society, in which people are valued by their position and ability. The purpose of walking in the pilgrimage is the recovery of the wellness of the whole body and of the senses.

From the point of view of human relationships, it could be said that the pilgrimage encourages a reevaluation of the meaning of family and of social status by allowing the pilgrim to set out alone, walking and thinking outside of their usual influence.

In this paper, we attempt to study middle-aged walking pilgrims. But nowadays in Shikoku, there are many kinds of walking pilgrims, including young people, women and married couples. This is a topic which deserves more study in the future.

＊1　Kanto Gakuin University; 1-50-1, Mutsuurahigashi, Kanazawa-Ku, Yokohama 236-8503, Japan.

key words：遍路（pilgrimage）、四国（the Shikoku-island）、歩くこと（walking）、異界（another world）、接待（sense of welcome）、停年（the retirement age）、癒し（healing）

四国遍路は、大師信仰を背景とした接待などに見られるように、その包容性に特徴があった。これは現代四国遍路でも形を変えて続いている。これは、格差と選別を推し進める現代社会の有り様に対してアンチ・テーゼを呈している。また、歩くことによる身体性・感覚性の回復が意図されている。

人間関係の点から見ると、遍路は社会的地位や家族から離れ、一人になって、歩き、考えることによって、むしろ、それらの意味を新たに捉え直す出来事といえる。

本論では、中高年の歩き遍路を中心に検討を試みた。しかし現在、四国では若者、女性の歩き遍路、あるいは夫婦での歩き遍路もかなりの数にのぼる。そのような人たちに関する研究はこれから

＊1　関東学院大学人間環境学部人間発達学科；〒236-8503　横浜市金沢区六浦東１-50-１

の課題である。

序．研究概観および本論の目的

現在、四国遍路は一つのブームになっている。ただ、四国遍路は動機においても、目的も、巡り方も多様である。それぞれが固有な体験であり、そこで経験される「癒し」も多様である。

本論においては、現在、四国遍路で増加しているといわれる〈歩き遍路〉を中心に研究を試みた。どのような動機で出かけ、遍路体験をどう意味づけ、どのような結果（癒し）を得ているのかを中心に検討した。

現代の歩き遍路についての研究は、星野『四国遍路の宗教学的研究』(2001年)、佐藤久光『巡礼と遍路の社会学』(2004年)、長田攻一・坂田正顕・関三雄編『現代の四国遍路―道の社会学の視点から』(2003年)、浅川泰宏『巡礼の文化人類学的研究―四国遍路の接待文化』(2008年）などの大著の、それぞれ一部で取り上げられている。また、愛媛大学では、2003年度以降、毎年、「四国巡礼と世界の巡礼」について研究者を招いて公開シンポジウムを開催しており、2006年度はとくに、現代の四国遍路を取り上げ、歩き遍路についても研究発表がなされている。

それぞれの研究内容については必要に応じて本論の中で触れたいが、いずれも現代の社会的背景を踏まえつつ、さまざまな側面からアプローチがすすめられている状況といってよいのではないかと思われる。

本論文はもとより〈歩き遍路〉について、その全体像を提示しようとするものではない。すでに述べたように、歩き遍路に出かける動機も千差万別であり、そこで期待される内容も、体験も多様である。本論ではそのごく一部の分析を試みたに過ぎない。ただ、多様な体験の中からも、現代の共通の傾向がうかがえるのではないかと思う。

1.　四国遍路とその展開

四国遍路とは、周知のように、四国八十八ヶ所の札所寺院をお参りする行であり、伝統的には、弘法大師（空海）が開いたと伝えられている。巡礼者の持つ金剛杖は弘法大師の化身であり、一人で歩いていても、弘法大師が一緒に歩いていてくださっている（同行二人）象徴であると見なされる。

四国八十八ヶ所の起源は定かではないが、室町時代にその原型が形づくられ、江戸時代に完成を見たと考えられている[1)]。江戸時代には、僧侶、武士などの上流階級に加えて、農民や商人たちの庶民も巡礼に出かけるようになってくる[2)]。明治以降は新政府の宗教政策の変更により仏教は衰退

し、札所寺院も極度に荒廃し、それに伴って巡礼・遍路も低調になる[3)]。これは昭和中期まで続く。

四国遍路が注目される契機となったのが、1937（昭和12）年に南海電鉄によって開業50周年記念行事として開催された八十八ヶ寺院の出開帳である[4)]。この年、5月5日から6月16日まで、大阪、南海線沿線で出開帳がなされる。参拝者の総数は最終的には17万人から20万人に及んだといわれている。これによって四国遍路が近畿地方の人々に広く認知されることになる。それと同時に、この出開帳が札所寺院の組織である「四国八十八ヶ所霊場会」の組織化につながっていく[5)]。

戦後、四国遍路は新たな展開を遂げる。四国遍路の発展のきっかけとなったのがバスによる団体での遍路である。最初に運行を始めたのは伊予鉄バスである[6)]。遍路バス第1号は1953（昭和28）年4月26日に出発した。参加者は24名で、所要日程は13泊14日、参加費は一人当たり13,600円と、当時にしてはかなり高額であった。翌年には、徳島バスと高松バスも巡礼バスの募集を行っている。それから50周年を経た2003（平成15）年には、バスによる巡礼ツアーは伊予鉄バスだけでも年間1,000台を超えるまでになっている。

その後、ハイヤー、タクシーによる巡礼も始まり、マイカーによる巡礼も増加している。

四国遍路がとくに注目を浴び、多くの人々が遍路に訪れるようになったのは1990年代以降である。1990年になって、遍路は5万人を超え、2002年には8万人を超える。そして現時点では、15万人とも、20万人とも、あるいはそれ以上ともいわれる。このように1990年代に入って四国遍路が脚光を浴びるようになったのは、NHKを初めとする、テレビ、雑誌、新聞などマスコミでの報道が大きな影響を与えていることは想像に難くない。ちなみに、NHKでは1998年から2年間にわたって『四国八十八か所　心の旅』を放映した。これが四国遍路ブームに大きな影響を与えたと言われている[7)]。

また、遍路の巡拝のための交通網が整備されたことが遍路の増加の背景となったことも確かであろう。まず、1988年に開通した児島・坂出ルートを初めとして、神戸―鳴戸ルート（1997年開通）、尾道―今治ルート（1999年開通）と、3本の本四架橋が完成し、車で四国に渡るのが容易になる。これに合わせて、四国内の道路（自動車道路・遍路道）が整備される。

四国遍路の特徴のひとつは、「接待」といわれる慣習である[8)]。これは、地域住民からとくに歩き遍路に対してなされる飲食物や金銭の施与を中心とするさまざまな援助である。この「接待」は弘法大師に対してなされたものと見なされ、功徳を積む行為であると考えられている。

この「接待」の慣習は、必ずしも四国遍路に特有のものではなく、中世、近世にかけて西国、坂東巡礼にも見られたという。しかし、それは徐々に衰退していき、四国以外は昭和半ばを最後に消滅してしまう。四国遍路の場合はその後も残り、それが現在まで続いている[9)]。

ただ、四国遍路でも、昭和50年代後半から、交通機関が発達してバスや乗用車による遍路が増え、宿泊施設が整う中で、接待、善根宿が衰退した時期もあったという。しかし、平成期に入って

歩き遍路が見直される中で、衰退していた接待が再び復活してきた、という。

2.　〈歩き遍路〉の現況

1990年代以降、四国遍路が増加していくが、それと合わせて現代の遍路で特徴的なのが〈歩き遍路〉の増加である[10)]。もちろん、かつては誰もが歩いて回ったのであるが、それが変化したのは、すでに述べたように戦後のバスやタクシー、マイカーによる遍路の出現である。それが遍路の数をも拡大させていった。そして、高度成長期には歩きによる遍路はほとんど見られなかったといわれる[11)]。

これが近年、とくに1990年代以降、歩いて八十八ヶ所の札所を巡る〈歩き遍路〉が増加しているといわれる[12)]。ただ、四国遍路はすべてを歩き通すと千二百キロとも、千四百キロともいわれ、通しで歩くと30日から50日ほど要し、体力の面でも、期間の点でも誰にでも可能なわけではない。もっとも、八十八ヶ所を一回で歩き通すのではなく、何回かに区分けして巡る「区切り打ち」も多く、これもまた、歩き遍路に含まれる。

従来より一般に、歩き遍路は約１パーセント、現在では1000人ほどといわれるが、他方、１割以上になるのではないか、との指摘もある[13)]。ただいずれにしても、〈歩き遍路〉が大きく増加していることについては、研究者、札所寺院の住職、遍路宿経営者などが等しく指摘している。

歩き遍路が増えた背景について、一つは1980年代後半より盛んになった「ウォーキング・ブーム」が挙げられている[14)]。このウォーキング運動がエコロジー・自然保護運動とリンクして拡大に拍車をかけたという。都市化、産業化への反動とも言える自然回帰の流れであり、これは山歩きブームとも連動するのであろう。実際、国の施策もあって、四国遍路をハイキングとして捉えて活動していた時代もあった[15)]。

ただ、四国の歩き遍路の場合、集団で活動することはほとんどなく、個人かあるいはせいぜい数人で巡るのがほとんどである。したがって、そこにマス・ツーリズムへの対抗文化[16)]、マス・ツーリズムから個人化への移行[17)]が見られると指摘する研究者もいる。

たしかに、こうしたウォーキング・ブームや現代ツーリズムは〈歩き遍路〉ブームと共通する部分があり、それらが〈歩き遍路〉を増大させたという一面はあるのであろう。ただ、内容的にウォーキング・ブームと歩きによる四国遍路が同じ性格で、代替可能かどうかは、もう少し子細に検討する必要があるであろう。そこでは、なぜ四国なのか、なぜそれが四国遍路でなければならないのか、という必然性も明らかにされなければならないであろう。この点については後に触れたい。

3.　〈歩き遍路〉と「癒し」の体験

（1）　T氏の事例[18)]

T氏（神奈川県在住）は化学系のメーカーで研究開発に従事していたが、出勤中に息子からの電話で妻の死を知らされる。あわただしい中で葬儀を執り行い、墓地を決め、墓石をデザインし、49日の法要も終え、2ヶ月あまり経って、会社も新しい生活も以前と全く変わらないかのように進んでいた。ところが不意に、「体の内部から滲み出たものがいったん、心臓の下あたりでうずき、そこから上がって頬骨に集まり、出口を見つけて噴出してくる。それまで正確に刻んでいたはずの秒針が、電池切れのようにカタカタ振れるだけで先へ進まなくなる。そんな時間が襲ってくる」。そして、自分の半身がもがれてしまったような不安定さの中で「奪ったものを返してほしい。妻を返してほしい。」と、むなしい繰り言がしきりに口をついてくる。そうした思いを繰り返す中で、妻の供養ということを思いつき、四国に遍路に出かける。

T氏は突然妻を失った悲哀の中で、耐え難い身体症状を伴う不安感、焦燥感に襲われる。このような身体症状は、家族を失った悲しみの中でしばしば生じるようである[19)]。おそらく、頭の中では妻の死を理解し、受けとめようとするが情緒的にはそれを受け入れることができず、喪失の痛みが激しい身体症状を伴って内側からわき上がってくるのであろう。

そうした思いを繰り返す中で、「供養」という言葉が心に浮かび、四国遍路、1200キロの歩きの旅に出かける。なぜ四国遍路なのかというと、T氏によると、以前、マラソンに凝り始めたとき、四国八十八ヶ所のガイドブックを購入していたからである。そのときは、総行程1200キロあまりと知って、放り出していた。ただ、これで何か変わるとは期待できなかったが、八十八ヶ所という響きのいい数字が何かにすがりたかったT氏の心を捉え、「1200キロ、行けるところまで行ってみるか」という思いにさせたのだという。

T氏にとって四国はどういう意味を持っていたのであろうか。彼は妻の「供養」のためにということで遍路に出かけた。なぜ「供養」ということが頭に浮かんだのであろうか。おそらく、身近な人を失って悲しみの中にある人たちが、死者の冥福を祈るため、あるいは追善供養のために四国遍路に出かける[20)]、ということを情報として得ていたということもあるのであろう。また、自らの身体と心に迫ってくるやるせない不安な状況では妻が成仏できないのではないか、と考えたのでもあろう。あるいは、妻がまだ成仏していないから、そうした不安に襲われるとも考えたのかも知れない。いずれにしても、自分の半身がもぎ取られて、それぞれがまだその落ち着く場所を得ていない、といった状況であろう。そのようなT氏にとっては、四国は死者の魂とふれ合うことのできる

異界のように感じられたのかも知れない。

かつては、1,200キロという途方もない距離と知って尻込みしたが、今度は、その途方もない距離が自分の苦悩の限りない深さと不思議に呼応したのであろう。また、T氏は八十八という響きのいい数字に惹かれたというが、彼は理性によっては解決できない状況に直面して、理性を超えたものに一種の魔術作用のようなものを期待したのであろう。妻の供養・鎮魂のためにと、札所寺院の真言を唱えるが、それも、彼にとっては妻への鎮魂であり、かつ自らの悲しみ、痛みを和らげてくれるかも知れない魔法の呪文のようなものであったのであろう。

T氏は遍路に出かけて歩き、さまざまな人に出会い、それぞれ苦しみや祈願を抱えて遍路に旅立っているという話を聴くが、自らが遍路に出た理由については語らない。ようやく、1週間あまり経ってから、「妻を亡くして四国を歩いてみる気になった」と話すようになる。

T氏にとっては、当初、妻を失ったという出来事は自身の固有な体験であり、誰にも理解してもらえない、という思いだったに違いない。ただ、まわりの多くの遍路と出会う中で、多くの人たちがそれぞれの苦悩を持ちながら歩いているということを知り、自らの苦悩が共通の体験へと広がっていったということができるであろう。その中で、自らの苦しみを相対化しすることができたと見ることができるであろう。このような、他者の体験との出会いの中で、自らの苦しみが相対化され、癒されていくことについてはしばしば指摘されている[21)]。

室戸阿南海岸国定公園の長い海岸線を歩いていく内に、自然の相貌が浮き出てくる。これは「岩、海、波そして自分、それらを見つめ通せる貴重な機会」を与えてくれる。これは、大いなる自然の中で、自分がその中のちっぽけな存在として相対化される視点ということができるであろう。

そのようなときに子どもからの電話で現実に連れ戻され、そして、子どもたちを介して妻のことが思い出される。初産の不安、出産がのびのびになったこと、出産後、長男が危険な状態だったこと、等々が頭をよぎる。

遍路の旅は、一人になることも多い。そんなときは妻との会話がはじまる。妻と出かけたさまざまな場面が現れ、妻の話し声、息づかいが昨日のように聞こえてくる。匂いさえもしてくる。

「遍路ころがし」と呼ばれる、急坂の難所にさしかかると、息が切れ、対話をしている余裕などなくなる。息が切れると、頭が一瞬息抜きをする。対話、息切れ、頭の息抜き、対話、息切れ、頭の息抜き。この繰り返しの9日間であった、という。これは妻への執着から徐々に解放されていく過程と考えることができるであろう。

そして彼は、最初は亡くなった妻の供養のために歩こうと思いたち、そうした思いで歩いてきたが、しかし「四国歩きは亡くなった人のための供養では決してないと感じた。確かに札所ごとに手を合わせ、妻のために礼拝し真言を唱えてきた。形はそうである。しかし本当は生き残った側の魂

を鎮めるレクイエム、生き残ったものを応援するエールの旅である。」という思いがした。それに対して、妻も彼の心の中に「出てみてよかったね」とささやく。

私自身も数年前、父を亡くし、家の菩提寺であった浄土宗の寺で葬式をし、葬儀、法要に参列した。葬儀や法要はもちろん、死者の霊魂をあの世に送る儀式であるが、しかしそれと同時に、生き残った者たちを慰め、その魂を鎮める儀式だということを痛切に感じさせられた。

Ｔ氏は、遍路は「生き残った側の魂を鎮めるレクエイム、生き残ったものを応援するエールの旅」だと悟り、「出てみてよかったね」との妻のささやきを聞いてから、かつて自分を襲った「電池切れで秒針がカタカタ振れるだけのとき」は当分おとずれないだろうとの思いを抱く。

そんな中で、レオ・バスカーリア作の絵本『葉っぱのフレディ』や『歎異抄』、森健『人体改造の世紀』などを通して生と死の意味について考え、自分なりに次のような結論にいたる。

「私たちは全て“生という場”で遺伝子の混合（多様化）を起こすためのすぐれたキャリアーである。そして多様化の役目を終えると、静かに“生という場”を降りる。即ち死を迎える。混合して出来上がった遺伝子たちは、私たちキャリアーのことにはお構いなく、多様性を獲得しつつ永遠に変化していく。全ては種全体にとっての共有財産のためであり、その財産はどんどん増えていく設計図なのである。遺伝子は舞台裏で永劫続いていき、キャリアーは遺伝子に薄皮一枚身に付けて、この世の表舞台に一幕だけ登場するのである。それは多様性を求める全体計画の一途な機能である。そんな一途な私たちキャリアーを大自然の設計者は放置しておくわけがない。舞台を下りる私たちを『ありがとうよ』と摂（おさ）め取ってくださるのである。」

これは妻の生と死を自分なりに理性的に理解し、その意味を受けとめた、ということができるであろう。ただ、このような理解に至るまでには、Ｔ氏の心の思い・情緒が鎮まり、落ち着きどころを得る必要があったであろう。それにはそれなりの期間と、四国を歩くという経験が大きな意味を持ったのであろう。

翌年の７月、高知に降り立ったＴ氏は再び昨年度終えた場所から遍路の旅を始める。そこで友人との出会いの不思議さ、全てのことがつながっている、という思いを感じる。そしてさらに、その同じ年の暮れ、「次の夏休みまで待てず」再び遍路に来る。妻との出会い、結婚、出産、子どもの成長を思い起こしながら、「遺伝子のキャリアー二人が、この世の舞台に立ち、愛し合ったことは消えない。たとえ遺伝子側は忘れてしまおうとも。」との思いに至り、妻との別れを受け入れる。そして「最後の関所がもっと続いてくれればよかったのに」という思いで結願する。そして、間近迫ってきた「娘の結婚式に応援歌を歌う」ことを決意して結ぶ。

（２） 定年退職者の〈歩き遍路〉

定年退職を機会に歩き遍路に出かける60代の中年の男性が最も多いといわれる。1996年の「道空間研究会」のアンケートでも、徒歩遍路者80人の内、30人が退職をきっかけとした人であったという[22]。また2006年春３月から４月に愛媛大学の共同研究グループで行ったアンケートでも、歩き遍路の約５割、47.7％が60代であり、次いで多いのが70代の15.9％、次に50代が13.6％である[23]。ここでは退職者かどうかは明記していないが、年代や、３月後半から４月前半に歩き遍路をするためにある程度の期間が取れることを考慮すると、日常的な勤務を求められる職場からは解放されている人がかなり多いものと推察される。

退職をきっかけにした徒歩遍路者について、『現代の四国遍路』では次のように指摘している[24]。

彼らは高度成長を支えてきた、いわゆる「ガンバリズム」という世代特性を有しており、「人生80年代」の長い「余生」の中で、「まだがんばれる」「まだ若い」という意識が強く残っている。加えて、高度成長期にコミットしてきた自己規定（貢献＝報酬の図式）の中で一定の機能を果たしてきた自己が解除され、自己同定が動揺する中でこれに変わる自己を探求したいという欲求の中で、自己確認の機会となっている。これらは、「生活時空がある状態から別の状態へと移行する際の、その境界時点に遍路があてがわれている、と解釈することができる」といわれる。

しかしこれと共に、ゆっくりと余生へと移りゆくことを許さない、時代の急激な変転も挙げることができるであろう。私自身が四十七番札所、八坂寺で出会った、東海地方から来ていた中高年の方は、店を営んでおられたが、世代交代でご子息に店を譲り、それでも一緒に店を切り盛りしていたのだという。ところが、数年前から、親父のやり方はもう古いから店のことには口を出さないで自分に任せてくれ、とご子息に宣告され、遍路を始めたとのことであった。この方の場合は、定年で退職したわけではないが、かつてのように「年の功」が必ずしも有効ではなく、尊重もされない世の中の流れの中で、自分の新しい世界、新しい生き方を〈歩き遍路〉に求めた、ということができるであろう。

Ｙ氏もそうした、定年をきっかけにして歩き遍路に出かけた一人である[25]。Ｙ氏は50年代半ば過ぎから、友人と酒を飲むと「定年後はどうするのか」と問われ、返答に窮して「四国八十八ヶ所巡りと富士登山を計画している」と答えながらも、定年後のことを自分なりに考え始める。とりあえず、定年後一年間をどう過ごすだけかを考えることにする。その間に、次の一年間が思いつくだろうと考えて、最初の一年間の準備をする。人に言ってきた手前もあり、また興味もあったので「四国八十八ヶ所巡り」の手引き書を購入して読み始める。

定年退職が加齢に伴って「知力、体力、気力」が衰えてくることから、それまでの仕事をから引き離すために設けられた制度であることが実感として感じられるようになった。それなら、知力は

あきらめるとしても、体力、気力がそんなに衰えているのか、自分で確かめたくなり、その格好の舞台が四国遍路のような気がして、挑戦してみようと考える。

退職前後の中高年の男性にとって、体力・気力の衰えを実感する中で、その限界に挑戦し、自分自身に自信を取り戻し、これからの人生を乗り越えていこうと考えるのは自然のことである。K氏も、妻とマイカーでの巡拝をして満願を達成したが、途中で歩き遍路を何人も見て自分も歩いて遍路の旅に出たいという衝動に駆られていた[26)]。ところが、妻からは「あなたの体力では無理よ」と反対される。その後まもなく退職するも事情が許さずなかなか行かれなかった。そのうち、同年代で政治家として忙しい日々を送っている菅直人氏が四国遍路に出かけたとのニュースに触れ、ショックを受けて遍路への出発を決断する。K氏の場合も、「体力気力の限界に挑戦」することが一つの目標である。ただ、社会的にも、年齢的にも経験豊富な世代でもあるので、「無理をしない」こともモットーとなっている。

上記のような退職をきっかけとして遍路に出かける人たちにとって、体力や気力の衰えに対する不安・自分の健康に関しての不安が背景にあることがアンケート上でも確認できる[27)]。

ただ、体力・気力の問題が遍路に出かけるきっかけの表面に出ているが、そればかりではなく、その背後には別な問題が伏在しているように思われる。すなわち、退職後の新しい状況の中でどう生きていくか、という生き方・生活についての不安や葛藤である。

ただ、四国遍路は元来宗教的な世界、信仰修行の場である。Y氏とK氏は遍路を巡るにあたって、信仰的な事柄についてはどう考えていたのであろうか。

Y氏ももちろん、四国八十八ヶ所が霊場であり、信仰の対象であることをわきまえている。自分は信者ではないが、信仰する人に不快感を与えないように、最低限度のマナーを心がけなければ行けないと考えて写経、納札などを用意する。服装は、辰濃和男著『四国遍路』（岩波新書）を参考にして、菅傘、道中衣（白衣）、金剛杖は身に付けるが、信者ではないので輪袈裟は着用しないこととする。四国遍路の礼拝の作法は、本堂と大師堂の二ヶ所に般若心経を納めて（読経）納経帳に御朱印をいただくことを学び、作法に倣う形で巡拝を続ける。

Y氏は信仰者に失礼にならないようにということで、服装に気をつけ、作法を守りながら遍路を続けるが、地域の人々から「おへんろさん」と呼ばれたとき、「固有名詞で呼ばれないと、居場所がない、存在感がない自分がいなくなるような、そんな不安に近いような、何とも不思議な感じだった。」という。その後、八十八ヶ所を巡り終え、納経するために高野山に向かう。ホテルで遍路の衣装や荷物を全て自宅に送って普段の服装で高野山に向かうが、途中で、遍路宿で知り合ったA氏―遍路の白装束をし、金剛杖を携えていた―に出会い声をかける。ところが、A氏はY氏に気がつかずに行ってしまう。こちらからはA氏が見え、A氏からはこちらが見えない状況について不思議な感じがして、Y氏は「自分が『お遍路さん』という『一般名詞』で呼ばれる異次元の世界か

ら、Ｙさんという『固有名詞』で呼ばれる現実の世界に戻ったような気がした。そして心の中で『ああ、私のお遍路さんは終わったんだな』と実感した」という。

旅を終えてから、上記の体験をＹ氏は「お遍路をして一面識もない人に赤裸々に自分をさらけ出しても、相手は自分の個人名はもちろんのこと、何処にすんでいるかも知らない。相手が分かるのは『お遍路さん』であることだけである。・・・自分が『透明人間』になった感じに近い感覚かもしれない。・・・職業、社会的地位、家族、お金の有無、男女の性差、年齢差などによる上下の関係などの『しがらみ』から離れた、独り独りの人間と人間の関係だから、話しをしていてとても楽しい。如何に多くの『しがらみ』の中で、日頃は生活しているのか、改めて気付かされた旅だった。これからは、この『しがらみ』を多少距離を置いて眺め、付き合っていければ、これからの人生、少しは気持ちを楽に持って過ごせるのかな、などと考えている。」と、総括している。

Ｙ氏にとっては遍路の経験はどのような意味を持ったのであろうか。何か御利益があったのか、というと、「御利益はあった」という。それは「お遍路に行き、結願できたこと」、歩き通すことができたこと自体が御利益だった、という。というのも、歩き遍路をするには、お金、時間、体力、家族の理解、その他さまざまな条件が必要であり、自分の場合、それに恵まれた、すなわち、「御大師様のお招き」があったからなのだ、という。これは一方では、体力的にも歩き通す力があったという、自らの力に対する自信にもつながるが、しかしそればかりではなく、自分に働いている大きな恵みの力に気付かされた、ということであろう。

それでは、「何か悟れたのか」というと、「全然効果はなかったと思う」、「一回歩いただけで悟れるわけがない」という。ただ、上で述べたように、自分が多くの「しがらみ」の中で生活していることに気付かされ、この「しがらみ」を多少距離を置いて眺めることの大切さを知った、という。そして、「食べること、排泄すること、眠ることだけを考え、自然の中に身をゆだね、ゆっくり時間が過ぎていく、そんな遍路の体験」ができたこと自体が本当に良かった、と語る。

Ｋ氏の場合、かつて妻とマイカーで巡拝したように素朴な信仰心は持っているようである。遍路のテーマの中にも、最後の８番目に「祈ること（妻の病気回復、娘の結婚、ついでに自分の健康）」が挙げられており、宗教的な意味合いも含まれている。ただそれはあくまでも周辺的なことであり、歩くこと、体力、気力の限界に挑戦することと共に旅を楽しむことが主な目標となっている。Ｋ氏の場合、八十八ヶ所だけではなく、別格二十ヶ所も含めて、全部で百八ヶ所を巡る旅であり、なおさらのこと過酷な旅となっている。

Ｋ氏の遍路も純粋に信仰的なものとは言えないが、ただ御利益がいいと伝えられている「硯の加持水」を飲み、迷信だとは思いつつも「黄金の井戸」に自分の顔が映っているのを確認して安心する。満願を達成した人の菅傘をいただいて「縁起も良さそうだし、御利益にもありつけそうだ」と感じる、素朴な信仰心は持っているようである。

K氏は遍路に出て何を得たのであろうか。K氏は遍路を終えて家に帰ると、妻からは「遍路に出てき何を悟ったの。好き勝手なことをしただけで何も変わっていないじゃないの」と罵声を浴びる。反論できない。しかし、K氏は「私は旅の途中で、見知らぬ方々から思いもよらぬ温かい接待や励ましに元気づけられながらも、何とか満願成就できたことに自信と誇りを持っている。相手は気づいていないかもしれないが、他人に対する接し方はやさしくなったつもりである、家族に対しては今まで以上に思いやりを持つようになったと思っている。」と語る。

K氏も「何か悟ったのか」といわれると、「悟った」ということはできない。ただ、満願成就できたことには「自信と誇り」を持っている、と語る。しかし、これは自分自身の力だけによるのではなく、見知らぬ方々からの温かい接待や励ましに支えられてのことである。家族からも離れ、一人で旅立ったが、見知らぬ方々からの接待や励ましを受けて相手に対する思いやりを増したのだ、という。それは家族関係を支える力にもなっている。これは言い換えると、日常生活・日常の家族関係から離れて一人で歩いてみて、日常生活の意味を新たに捉えなおした、ということができるのではないかと思う。

4. 〈異界〉としての四国

なぜ「四国」なのであろうか。もちろん、遍路に出かける人それぞれの目的も異なるように、四国の意味合いも微妙に異なってくるであろう。ただ、遍路体験の中で幅広く見受けられるものもある。

Y氏は、遍路体験は自分が職業、社会的地位、家族等から離れて「透明人間」になった感じ、と語っていた。K氏も「頭を空にして歩く」と、「何かが見えてくるかも知れない」ということを遍路の目標の一つにしている。辰濃和男も「こころをからっぽに」して歩けば、「超過密社会の日常にあって見えなかったものが見えてくるだろう」と期待を語る[28)]。

これらは、四国での遍路において日常の経験とは異なる経験を求め、期待していることを示している。もっとも、これは四国と限らず、旅に出ること自体が日常生活とは異なった経験を求めてなされることが多いものであり、程度の差に過ぎないということもできよう。ただ、遍路に出るにあたっては白衣に身を固め、金剛杖を所持して、作法に則って巡拝する。形式とは言え、白衣は「死者」の姿を象徴するものであり、これを着ることによって俗世を離れ、清浄な身で巡礼すること意味していた[29)]。遍路者もこの服装で、日々の生活から離れ、日常の人間関係からも離れ、一定の期間四国に身を置くことによって、それが非日常的な体験であるということを強く意識せざるを得ない。妻と四国を巡った作家の車田も遍路の来たのは「俗世の悪臭から抜けたいがため」だと語る[30)]。

上記から見ていくと、四国は何らかの「非日常的な体験のできる場」、すなわち、一種の「異界」

として特徴づけられていると見ることができるであろう。

その古層を形づくるのは、もちろん、弘法大師にまつわる言い伝え、そしてその後語り続けられてきたさまざまな縁起物語であろう。ただ、あまり信仰にこだわらない現代遍路にとっては、それらが時には異様な姿を現すことはあっても、一般には体験の中であまり大きな意味を持たないように思われる。

現代の歩き遍路にとって、四国の特殊性、あるいはその異界性が顕著に感じられるのは、「接待」によってであると思われる。遍路者は見知らぬ人たちからの接待に初めは戸惑うが、それらの接待によって励まされ、支えられつつ歩き通す。四国は「地域住民の生活空間を『余所者』が歩く旅が公認・保証されている、いわば、『歩く旅ができる土地』」[31]であるばかりではなく、一人で歩いている遍路を善意ある他者が受けとめてくれる、善意ある人たちで溢れている[32]土地である。

こうした見知らぬ人たちによってなされる接待は、日常的な社会生活では考えられないものである。とくに近年、グローバル化の流れの中で、社会生活にゆとりがなくなり、人々が分断され、対立させられ、社会的弱者が切り捨てられている状況の中ではなおさらのことである。四国はこうした現代社会の有り様に対するアンチテーゼとしての〈異界〉として機能している、と見ることができる。

こうした世俗の利害関係や人間関係を超えた関係は、地域住民と遍路者との間ばかりではなく、歩いている遍路者同士の間にも成立する。見知らぬ遍路者同士、時には一緒になり、互いに話を交わし、あるいは時には、微妙な距離を取りつつそれぞれ一人で歩んでいく。

これは大師信仰を背景として、四国の歴史と風土がはぐくんできた受容性、包容性のようなものがもとになっているのではないかと思われる。かつて、病者やハンセン氏病者など当時の社会から締め出された人たちを受け入れ、いまもなお宗派によらず、信仰の有無にもよらず、外国人もキリスト教信者もまた受け入れてくれる。K氏も、53番札所、円明寺が江戸時代隠れキリシタンの礼拝を黙認してきたおおらかさを紹介している。星野によると、そもそも、四国遍路そのものが、確かに仏教を背景には成立しているが超宗派的、非聖職者的、非教団的、民衆的なのだ、という[33]。

また、四国の風景も特別な意味合いを持っているようである。遍路者たちは「原日本の風景のようだ」とか、「昔の日本を見るようだ」という。そしてしばしば、歩いている中で出会う自然の美しさを語る。たしかに、四国は他の地域と比べて開発があまり進まず、昔の自然がそのまま残っているところも多い。また、遍路道がある程度整えられ、それが海に面したところもあれば、険しい山道もあり、平坦な田園風景、清流に沿ったところ、と変化に富んでいる。こうした点に魅力を感じるのではないかと思われるが、そればかりではなく、歩きながら、ゆったりとした時間の流れの中で出会う風景は特別な意味合いを持ってくるものと思われる。

5. 〈歩くこと〉

歩き遍路をした方にとっては、「歩くこと」は特別な意味を持っている。前に触れたK氏も「遍路とは歩いてこそ値打ちがある。」と語る。作家の車谷長吉も、バスやタクシー、自動車で札所を巡る人たちを、楽して御利益を得ようとしている人たちだとしてたびたびけなし、歩き遍路を称揚している。

歩くことがなぜ賞賛されるのか、それはもちろん、一つにはその苦しみ、苦行としての性格である。1200キロ以上も歩き通すこと、しかも、ところによってはアップダウンの激しい遍路道を辿ることは並大抵のことではない。出版されている歩き遍路体験記のほとんどに、道中でのさまざまな苦労が記されている。かつては、遍路の途中で死を迎え、そのまま埋葬された人も少なくなかったようである。現在でも、遍路の厳しさのために途中で挫折してしまう人も少なくない。したがって、歩くこと自体が厳しい修行になる。

歩き通すことにはそれだけの苦しみが伴うのであるから、それ相応の御利益が得られることが期待された。日本では古来より、聖地そのものよりも参詣の路程、すなわち、道中を歩く苦行としての歩きが重視されてきた、といわれる[34)]。星野は、参詣の路程が大きな意味をもつということは、現代の歩き遍路の体験報告や研究者の分析によっても指摘されている、と語る[35)]。ただ、巡礼地・霊場を多くして、より多く歩いて苦行を重ねるということは必ずしも日本だけの伝統ではなく、西欧の巡礼にも見られることである[36)]。また、歩くことの意味は、日本の古来の伝統に結びつけて考察するよりは、むしろ、その現代的意味に注目すべきと思われる。というのも、高度成長期には歩き遍路はほとんど途絶えていたのであり、それがブームとなるのは1990年代に入ってからであり、これはきわめて現代的な現象だからである。

それでは現代の歩き遍路にとっては、「歩くこと」はどのような意味を持っているのであろうか。多くの遍路は必ずしも信仰や修行のために歩くわけではない。むしろ、「歩くこと」による自己確認を動機としてあげる、という。すなわち、単に歩いてみたい、自己を見つめたい、自然に触れたい、といった欲求から行っているのではないか、という[37)]。

「自己を見つめたい」ということは、もちろん、今のままの自分とは違う自分が目標となっている。いわば、自己をリセットするため歩くのである。これは、歩き遍路者がたびたび語る、「頭を空っぽにして歩く」、「歩いてこころをからにする」ということにも通じる。

この「頭を空っぽにする」、「こころをからにする」具体的にはどのような内容なのであろうか。「歩く」ということは、体のリズム、肉体のリズムを中心にすることである。ひたすら歩くことによって、意識は足を中心とする体の動きに集中し、日常の場で自らを縛り付けている思考や感情か

ら解放されていく[38]。T氏も歩いていく中で、急死した妻に対する哀惜の思いが癒されていく。

こればかりではなく、歩くことによって感覚が研ぎすまされ、鋭敏になっていく[39]。歩くことによって身体の代謝機能が高まり、中枢神経全体に影響を与えることによるのかも知れない[40]。あるいは、歩いてゆったりとした時間の中で過ごすこと自体が濃密な体験を味わわせるのかも知れない。しかしいずれにしても、人間の身体性を基盤にして、身体も精神も一体として感じられる出来事といってよいのであろう[41]。

6. むすび

四国遍路は、大師信仰を背景とした接待などに見られるように、その包容性に特徴があった。これは現代四国遍路でも形を変えて続いている。これは、格差と選別を推し進める現代社会の有り様に対してアンチ・テーゼを呈している。また、歩くことは身体性・感覚性の回復を目指している。

人間関係の点から見ると、遍路は日常生活における社会的地位や家族から離れ、一人になって、歩き、自分に向き合い、考えることによって、日常生活の意味を新たに捉え直す出来事といえる。

本論では、中高年の歩き遍路を中心に検討を試みた。しかし現在、四国では若者、女性の歩き遍路、あるいは夫婦での歩き遍路もかなりの数にのぼる。そのような人たちについての検討はこれからの課題である。

（なお、本論文は、2008年度「人間環境学部環境学会」の研究補助を受けて、研究をすすめた成果です。感謝申し上げます。）

注

1） 佐藤久光『遍路と巡礼の社会学』人文書院、2004年、62頁。
2） 上掲書、73頁。
3） 上掲書、73頁。
4） 森　正人『四国遍路の近現代』創元社、2005年、72頁以下。
佐藤久光『上掲書』126頁以下。
5） 森　正人『上掲書』91頁以下。
佐藤久光『上掲書』129頁以下。
6） 『伊予鉄巡拝バス五十年史』平成15年、伊予鉄道株式会社発行。
7） 森『上掲書』255頁以下。
8） 佐藤久光『遍路と巡礼の民俗』人文書院、2006年、74頁以下。
9） 上掲書、78頁以下。佐藤は、四国で接待の習俗が続いた理由として、地元住民の大師信仰、遍路には病人や下層民が多かったこと、遍路道の不便さを挙げている。
10） 森『上掲書』224頁。
星野英紀『四国遍路の宗教学的研究』法蔵館、2001年、353頁。
11） 長田攻一、坂田正顕、関三雄編『現代の四国遍路』学文社、2003年、267頁。

12） 1988年に四国遍路を歩いて回り、歩き遍路ブームに影響を与えたと言われている小林淳宏『定年からは同行二人』（PHP 研究所、1990年）によると、７月11日に１番札所で記帳したとき193人目であり、年間歩き遍路は300人で約半数は途中で脱落するとのことであった。
13） 佐藤久光『遍路と巡礼の社会学』の平成８年から９年にかけての調査によると4.9％であった（229頁）が、長田攻一、坂田正顕、関三雄編『現代の四国遍路』の1996年の調査では10.8％（271頁）、さらに、「徒歩が主で車、鉄道も利用」を含めると15.8％になる。2006年の竹川の調査では13.2％になる（竹川郁雄「聞き取り調査より探る現代の四国遍路」『現代の巡礼―四国遍路と世界の巡礼―』（公開シンポジウム・プロシーディングス）　愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」公開シンポジウム実行委員会　2006年、13頁）。
14） 星野『前掲書』355頁。
15） 森『前掲書』232頁。
16） 浅川泰宏『巡礼の文化人類学的研究―四国遍路の接待文化』古今書院、2008年、134～135頁。
17） 野崎賢也「現代ツーリズムと歩き遍路―アウトドアへの展開―」『現代の巡礼―四国遍路と世界の巡礼―』（公開シンポジウム・プロシーディングズ）　愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」公開シンポジウム実行委員会　2006年、21頁。
18） 高久ひとし『へんろ長調のぼり坂』文芸社、2005年。
19） J・W・ウォーデン著、鳴澤實監訳『グリーフ・カウンセリング』川島書店、1993年32頁。
20） 星野『前掲書』112頁。
21） 浅川『前掲書』417頁。
22） 長田・坂田・関編『前掲書』348頁。
23） 野崎賢也「前掲論文」18頁。
24） 長田・坂田・関編『前掲書』348頁。
25） 吉田正孝『ひょいと四国のお遍路へ―1200キロの歩き旅』現代書館、2006年。
26） 加藤弘昭『四国一〇八ヶ所遍路旅』新風舎　2005年。
27） 長田・坂田・関編『前掲書』345頁以下。
28） 辰濃和男『四国遍路』岩波書店、2001年、７頁。
29） 佐藤久光『遍路と巡礼の民俗』55頁。
30） 車谷長吉『四国八十八ヶ所感情巡礼』文藝春秋、2008年、60頁。
31） 野崎賢也「前掲論文」22頁。
32） 稲田道彦「四国遍路の巡礼路の特徴」『四国遍路と世界の巡礼』（平成16年度愛媛大学国際シンポジウム　プロシーディングズ　2004年）60-61頁。
33） 星野『前掲書』383-384頁。
34） 中村生雄「日本人の巡礼―〈歩く〉ことによる滅罪と浄化―」聖心女子大キリスト教文化研究所編『巡礼と文明』春秋社　1987年所収、23-54頁。
35） 星野『前掲書』359-360頁。
36） 木間瀬精三「西欧世界の巡礼」聖心女子大キリスト教文化研究所編『巡礼と文明』春秋社　1987年所収、152頁。
37） 長田・坂田・関編『前掲書』332頁。
38） アンドルー・ワイル著、上野圭一訳『癒す心、治る力』角川書店、1995年、277頁。
39） 星野『前掲書』24頁、374頁。
40） アンドルー・ワイル著『前掲書』263頁以下。
41） 星野『前掲書』364頁以下。